

怒りの表象、憤怒の練習曲

narrative étude

— ブログ「保育園落ちた日本死ね!!!」と文学 —

中 谷 ひ と み

1. 怒りの表象と対処法

大切なものを失うことは悲しみである。苦勞して念願のものを獲得するのは喜びである。いずれの感情からその人の価値観がうかがわれる。怒りもしかり。我を忘れるような怒りの暴力的占有から脱することができれば、自分が重要視しているものに注意を向けることができる。悲しみや喜びと同様に怒りからも、感情のうちに潜む価値観を明確に知ることができるのだ。「怒りとは『自己もしくは社会への、不当なもしくは故意による(と認知される)、物理的もしくは心理的な侵害に対する、自己防衛もしくは社会維持のために喚起された、心身の準備状態』である」(湯川 編 9)と定義づけられているように、怒りには否定的意味合いよりもむしろ、逆説的だが、自己保存や社会の存続維持・変革などの点で重要な意義があるのだ。とはいっても、我々は怒りの激情に翻弄される。それを克服するには瞑想や呼吸法と同様に、認知行動療法が有効であると言われる。その一つであるストレス免疫訓練には「怒りへの対処的自己陳述文」がある。自分に言い聞かせることで、怒りを和らげ、その感情を乗り切ることができる。「1. 今ここでできることを考えよう 2. 自分の思いどおりに人が動くとは限らない 3. 問題点を明らかにしよう 4. 冷静になろう 5. 私は自分をコントロールできる」(湯川 編 139)が効果的な文だと言われる。しかし認知的/行動的側面には効果があるが、感情的側面にはほとんどないという。(140)怒りの表出、抑制、制御には個人差があり、さらなる研究が必要とされている。(141参考)目を転じれば、主として女性の読者に対する「怒りのガイドブック」(Fischer; 村本 訳 4)の提供を試みたフェミニスト神学者・心理学者の Kathleen Fischer は、怒りの対処法として「休止をとる」、「深呼吸する」(32)、「からだを動かす」(33)、「瞑想する」(34)、「信頼する人に打ち明ける」(35)、「気分転換をする」、「思う存分泣く」(36)、「送らない手紙を書く」、「自分なりに、怒りを抑制する方法を知っておく」(37)ことを挙げている。怒りの克服法も様々だ。

日記などの筆記法も、効果があると言われる。感情や思考を文字化すれば、それらを明確化・相対化し、冷静そして客観的になって、以後の行動なども見えてくるからだ。ワークシートの例も挙げられているが(湯川 編 175)、怒り体験の日記式筆記開示は、実験で「感情を制御する力や心身の健康が向上する可能性が示唆され」たが、「特性的な怒り傾向や血圧など、比較的恒常性の高い性質までは効果が」(176)ないようであり、「自分の感情を言葉にすることが困難なタイプの人や…年齢や発達障害のために言語化が難しい人」には不適切である。筆記療法は「補

助的に用いられるのが望ましい」(177)という。さらに研究が必要とはいえ、習慣的に日記を書いていると、それが書き手に、「経験に注意を向けさせ、経験に馴れさせ、経験の認知的再体制化を助ける」(178)ことは確かであろう。文字化つまり語り(narrative)―断片的ではあっても物語として可視化・明示すること―が、怒りの感情の克服に有効なのだ。始点と終点があり、話の何らかの方向性も決まっているのが物語(story)だとすれば、そこまで完結していないにしても、偶然性や意外性が含まれていたり、漫然とした語りであっても、物語が立ち現れてくる可能性がある。

「文学」は自分とは何者か、どう生きるべきか、社会にはどんな問題があるか、どんな社会や未来を構築すべきかなどの、興味深い、時には重いテーマを扱う。よって、憤慨や憤怒の表象、怒る人物の感情や行動の記述(物語化)は、当事者や社会などについての内省を誘う「文学」のよき材料となり、それがまた文学の存在意義であるとも言える。小説、詩、演劇だけが「文学」ではない。「文学」に含まれる日記で恐怖の体験を書くことは、書き手自身が恐怖からのがれる個人的、感情的な効用があるという。怒りという直接的な表現ではないにしても、時代や運命に対する抵抗を巧みに表現すれば、時代の証言になったり、社会のありようなどを議論・再考したりする公的意義もある。例えば、ラッチェル・ブレンナーの『書くことによる抵抗―ホロコーストに直面した四人の女たち』によれば、アンネ・フランクの日記は、「ホロコーストのような、他と比べようもないほどの悪を理解し記述する、創造力あふれる文学」遺産の一つである。著者はその他に、エディット・シュタイン、シモーヌ・ヴェイユ、エティ・ヒルサムを論じている。(Fischer 199)

ブログ「保育園落ちた日本死ね!!!」が大きな話題となったことは記憶に新しい。国会議事堂前のデモ、国会での質疑応答、そして続くブログでの少なからぬ書き込みに発展した。若き母親の憤怒とそれを表現するブログの衝撃的言説に、共感にせよ憤慨にせよ、圧倒された人は多かろう。ブロガーが「理不尽さを感じて、独り言のつもりで投稿した」のなら、単なるつぶやきや怒りに任せた書きなぐりなら、無責任で一人よがりの自己満足であり、その言説は「文学」などとは到底考えられないかもしれない。しかし、「名文」だという小説家の意見があることは注意する必要がある。

アメリカ文学には「吠える」("Howl")という、ビート世代の代表的存在であるAllen Ginsbergの詩がある。当時のアメリカの資本主義や機械文明や商業主義社会に破壊される、純粋な精神を擁護する憤怒/慟哭の叫びであるが、日本アメリカ文学会東京支部の朗読会でも、詩人は文字通り「吠える」ような語調で聴衆を圧倒した。詩自体はアメリカ社会に対する激しい弾劾の怒号であるのみならず、純で清なる精神たちの生き方への共感と、自分も彼らの側で共に生き抜こうという決意表明であるが、酒と麻薬とセックスに関する乱暴で卑猥で下品な言葉のために「“ビート・ジェネレーションの聖書”」、「“悪書”」、「“これこそ人間的なダイナマイト”」(諏訪 137)と評価される「文学」作品である。どんなアメリカ文学史の教科書にもビート・ジェネレーションの代表作品として紹介されている。評論や研究論文も少なからずある。となれば、保育園ブログと詩「吠える」の違いは何であろうか。何が「文学」にするのか。本論は、日本のブログを端緒に、

いくつかのアメリカ「文学」の詩作品の解説を通して、「文学」とは何か、そして文学と文学研究の可能性と展望について考察してみようとする試みである。

2. 憤怒のエチュード—ブログ「保育園落ちた日本死ね!!!」

ブログ「保育園落ちた日本死ね!!!」はネット上では「下品な便所の落書」、怒りにまかせて書きなぐった感情的な言説、単なる幼稚で下品な八つ当たりなど、否定的な評が多い。しかし作家・瀬戸内寂聴は「名文」として肯定的に評価している：

この文章が下品だとかいう人もいたが、私は名文だと思う。これだけはっきり自分の意見を伝え、デモをおこすほど、力がある文章を名文といわなくて何と言おうか。(『北国新聞』2016年3月14日)

現在の日本のシステムでは、保育園入園が認められるか否かは様々な条件から合理的に、かつ慎重に決定されることになっており、それが不満なら、そして「死ね」というほど日本が嫌なら、そもそも日本という国から脱出して、自分がよしとするシステムを持つ国に移住すべきである、その自由は認められている、という意見もある。そうであるなら、ブログの主張は真剣に取り上げるべきではないのかもしれない。感情のおもむくままに不満をがなりたてることは、単なる自己満足であり、子供っぽい八つ当たりと言われても仕方ない。日本から脱出して理想的な国に移住できないのなら、日本が少しでも良き国になるよう積極的にはたらきかけたり、行動あるいは努力するのが「大人」である。しかし、本論ではこの点は考慮に入れず、主としてブログの内容・主張と、語選択や構成などの表現方法、そしてそれらの相互関係という点を考察する。文学や美術作品などの分析で注目されることが多い、内容と形式—この場合はむしろ言語表現—を吟味すれば、「文学」作品との比較も明確になるに違いない。ブログは「文学」を逆照射する。

以下は「流行りものカワラ版」におけるブログの全 narrative である。説明のため、各文に番号を付け、連の区切りと考えられるところに一行分スペースを挿入して見やすくする。このブログの言説を詩として読み、その言語表現や構造を分析するためだ。

第1連

- ①何なんだよ日本。
- ②一億総活躍社会じゃねーのかよ。

第2連

- ③昨日見事に保育園落ちたわ。
- ④どうすんだよ私活躍出来ねーじゃねーか。
- ⑤子供を産んで子育てして社会に出て働いて税金納めてやるって言ってるのに日本は何が不満なんだ？
- ⑥何が少子化だよクソ。

第3連

- ⑦子供産んだはいいけど希望通りに保育園に預けるのほぼ無理だからwって言って子供産むやつなんかいねーよ。
- ⑧不倫してもいいし賄賂受け取るのもどうでもいいから保育園増やせよ。
- ⑨オリンピックで何百億円無駄に使ってんだよ。
- ⑩エンブレムとかどうでもいいから保育園作れよ。
- ⑪有名なデザイナーに払う金あるなら保育園作れよ。
- ⑫どうすんだよ会社やめなくちゃならねーだろ。
- ⑬ふざけんな日本。

第4連

- ⑭保育園増やせないなら児童手当20万にしろよ。
- ⑮保育園も増やせないし児童手当も数千円しか払えないけど少子化なんとかしたいんだよねーってそんなムシのいい話あるかよボケ。
- ⑯国が子供産ませないでどうすんだよ。
- ⑰金があれば子供産むってやつがゴマンといるんだから取り敢えず金出すか子供にかかる費用全てを無償にしろよ。
- ⑱不倫したり賄賂受け取ったりウチワ作ってるやつ見繕って国会議員を半分位クビにするゃ財源作れるだろ。
- ⑲まじいい加減にしろ日本。

言説の特徴を思うまま列挙してみよう：

1. 文⑦の「w」のような、今どきの若者が使う流行文字も含み、語り言葉・口語体である。
2. 第1連の導入部分で、今の日本のあり方や政治・政策に対する不満という、ブログ全体の主張のまとめが提示される。この二行は、書き手の言葉にならないほどの怒りを簡潔に述べている。「一億総活躍社会を目指す」という安倍内閣のスローガンが実現されていないことへの不満と怒り、正しいことをしていると信じる自分の人生・生活が重大な影響を被っていることへの憤慨である。
3. 第2連以降は本文と考えられる。第2連で現状を説明し、第3連では、言葉は乱暴でも、思いを読者に直接的に語り、論理的に主張する言説には説得力すら感じられる。文⑧、⑩、⑪の短文を重ねることで、怒りのみならず「保育園作れ」という主張が、強く印象付けられる。下品で不穏当な語彙選択ではあっても、説得力があることは否定できないだろう。ただ単に感情をぶつけているだけではないのだ。かつて「読者」が本を手にする人に限られていたのとは異なり、今のネット社会では読者に困らない。そして想像を超えるような反応を引き起こす。ツイッターやブログにはこのブログのような、あるいはこれ以上に下品で不穏当な、殺すとか死ぬとかの言葉があふれているが、この言説はそれらとは異なる。音の繰り返しは記憶に残り、「保育

園作れ」という主張が読者に届きやすいが、このことは心理学的にも理に適っている。¹

4. 乱暴な言葉が各連の最後を占める：「何が少子化だよクソ」、「ふざけんな日本」、「まじい加減にしろ日本」。連の最終に置かれると、これらの言説に焦点があたり、怒りを強く印象づける。下品でぞんざいではあるが、ありのままの思いを自身の言葉で表現した、率直この上ない言葉づかいは、それが本音であるゆえに力があり、人を動かすのである。第4連では例外的に連の半ばに「そんなムシのいい話あるかよボケ」という、同様の短く下品な言葉が挿入されている。ほんくら政府の愚鈍さや、必要な政策を準備しない、口ばかりでムシがいい政府に対する憤りである。冷静に、論理的に語ろうとするものの、怒りがほとぼり出たのだ。書き手が意識的に挿入したというよりは、感情が吐露された、自然体のままに言語化されたと考える。

5. 短文以外の比較的長い文は論理的な言説であるが、すべてコンマなしであることに注意しなければならない。単なる感情の激発というよりは、自分の思い・主張を一気に畳みかけるように語っている。主張そのものは十分に論理的である。

6. 第4連では、第3連に引き続き論理的な言説が続き、保育園を増やせないなら別の可能な対応策である児童手当に言及しながら、国の積極的対策を促す。第3連同様、論理的言説にぶれはない。財源不足なら、役立たずの国会議員を半減するという大胆な案を提示するが、問題を起こした国会議員や政治の実情を踏まえた主張であり、納得できる。読者は苦笑いするところである。どんな悲劇的な文学作品にもユーモアや“comic relief”が内在することを思い出す。このように、感情と論理的説得が巧みに織り込まれながら語りは進む。

7. 各連に含まれる文の数は2, 4, 7, 6であるが、連が進むにつれて、各言説の量(かさ)は膨らんでいく。このことは怒りの増幅を視覚的に示唆していると考えられる。視覚的効果をねらった一種の具象詩(“concrete poem”：文字・記号などの空間的配列で効果的に表現する詩)である。起承転結とは異なり、2行にわたる導入部から三つの連の本文を発展的に提示したブログの言説は閉じない。怒りは開かれており、憤怒が続くことを視覚・構造的にも予感させている。

以上の分析から、確かに「下品な」言葉づかいはあるが、言葉の選択、繰り返しや並列、構成の巧みさなどが見て取れる。これらの言語表現法上の戦略は「文学」のそれにも共通するものである。意識したにせよ、しなかったにせよ、自分の主張を論理的な説得力で展開する、効果的な言語戦略である。意識せずの言説であるなら、書き手が多少なりとも「文学」的才能を持つことは否定できないのではないか。

それでは、このブログは「文学」作品と考えてもよいのだろうか。

3. 憤怒/慟哭のエチュード—Allen Ginsberg, “Howl”

イギリス文学には文字通り“Angry Young Men”の怒りの言説がある。「主として国教や王室に代表されるようなイギリスの古さに対する怒りあるいは反撥」と言える。「衰えゆく”大英帝国”の焦燥感が重複している」(諏訪 178)とも考えられるが、イギリスの独特な社会制度や体制に対する怒りを表現したものである。一方、アメリカ文学史には怒り言説の系譜narrativeとも言うべきものがある。アフリカ系アメリカ人たちの「文学」は、自分たち黒人の人権を主張する怒りの

言説である抗議小説から始まる。資本主義経済の問題が露呈・深刻化しつつある時期には、社会悪を暴露し、社会変革にまで繋がった” Muckrakers” の怒りが小説という形で具体化される。Upton Sinclair, *The Jungle* (1906) が代表例である(詳しくは猿谷 169-74 参考) これらは「文学」として認知されている。しかし、アメリカ文学の「怒り」表象といえば、Allen Ginsbergの詩“*Howl*” (1955執筆、1956出版)を想起する人は多かろう。Jonesは「ドラッグ、乱交、若者の疎外、資本主義、産業化、表現、体制順応、セクシュアリティ、そしてどん底で生きる美しさ(“the beauty of being in the gutter”）」についての詩であると評している。Jazz、酒、麻薬に囲まれ、同性愛者として生きた作者ギンズバーグの人生のみならず、“cock” など卑猥な単語の頻出でも有名である。自然な性的欲求や人間らしい生き方を象徴する生身の「ペニス」とは対照的に、アメリカ社会は「花崗岩のペニス (“granite cocks”）」である。社会の複雑で強大な力によって非人間化、画一化されることへの怒りと抵抗が、漂流する怒りが巧みに言語化され、構造化される。少し長いが、重要部分を引用する：

I

I saw the best minds of my generation destroyed by madness, starving hysterical naked,
dragging themselves through the negro streets at dawn looking for an angry fix,
angelheaded hipsters burning for the ancient heavenly connection to the starry dynamo
in the machinery of night,
who poverty and tatters and hollow-eyed and high sat up smoking in the supernatural
darkness of cold-water flats floating across the tops of cities contemplating jazz,
who bared their brains to Heaven under the El and saw Mohammedan angels staggering
on tenement roofs illuminated,
who passed through universities with radiant cool eyes hallucinating Arkansas and Blake-
light tragedy among the scholars of war,
who were expelled from the academies for crazy & publishing obscene odes on the
windows of the skull,
...
who ate fire in paint hotels or drank turpentine in Paradise Alley, death, or purgatoried
their torsos night after night
with dreams, with drugs, with waking nightmares, alcohol and cock and endless balls,
incomparable blind streets of shuddering cloud and lightning in the mind leaping toward
poles of Canada & Paterson, illuminating all the motionless world of Time between,
Peyote solidities of halls, backyard green tree cemetery dawns, wine drunkenness over
the rooftops, storefront boroughs of teahead joyride neon blinking traffic light, sun and
moon and tree vibrations in the roaring winter dusks of Brooklyn, ashcan rantings and

kind king light of mind,

...

the madman bum and angel beat in Time, unknown, yet putting down here what might
be left to say in time come after death,
and rose reincarnate in the ghostly clothes of jazz in the goldhorn shadow of the band
and blew the suffering of America's naked mind for love into an eli eli lamma lamma
sabacthani saxophone cry that shivered the cities down to the last radio
with the absolute heart of the poem of life butchered out of their own bodies good to eat a
thousand years.

II

What sphinx of cement and aluminum bashed open their skulls and ate up their brains
and imagination?

Moloch! Solitude! Filth! Ugliness! Ashcans and unobtainable dollars! Children screaming
under the stairways! Boys sobbing in armies! Old men weeping in the parks!

...

Moloch whose mind is pure machinery! Moloch whose blood is running money! Moloch
whose fingers are ten armies! Moloch whose breast is a cannibal dynamo! Moloch
whose ear is a smoking tomb!

...

Moloch whose love is endless oil and stone! Moloch whose soul is electricity and banks!
Moloch whose poverty is the specter of genius! Moloch whose fate is a cloud of sexless
hydrogen! Moloch whose name is the Mind!

...

Moloch! Moloch! Robot apartments! invisible suburbs! skeleton treasuries! blind capitals!
demonic industries! spectral nations! invincible madhouses! granite cocks! monstrous
bombs!

They broke their backs lifting Moloch to Heaven! Pavements, tree, radios, tons! lifting the
city to Heaven which exists and is everywhere about us!

Visions! omens! hallucinations! miracles! ecstasies! gone down the American river!

Dreams! adorations! illuminations! religions! the whole boatload of sensitive bullshit!

Breakthroughs! over the river! flips and crucifixions! gone down the flood! Highs!

Epiphanies! Despairs! Ten years' animal screams and suicides! Minds! New loves! Mad
generation! down on the rocks of Time!

Real holy laughter in the river! They saw it all! the wild eyes! the holy yells! They bade

farewell! They jumped off the roof! to solitude! waving! carrying flowers! Down to the river! into the street!

III

Carl Solomon! I'm with you in Rockland

where you're madder than I am

I'm with you in Rockland

where you must feel very strange

...

I'm with you in Rockland

in my dreams you walk dripping from a sea-journey on the highway across America in tears to the door of my cottage in the Western night

上記引用を中心とした重要部分の拙訳を記す(諏訪 140-2、145-8が参考になる)：

僕は見た 狂気によって破壊された僕の世代の最良の精神たちを 飢え 苛立ち 裸で
夜明けの黒人街を怒りの一服の薬を求めてのろのろ歩いてゆくのを
夜の機械のなかの星のようなダイナモとの 古代の神聖な関係を熱望する 天使の頭をし
たヒップスターたち

ある者は 金もなくボロボロのシャツを着て 虚ろな目でタバコをふかし 寝もせずに
湯も出ないアパートの超自然的暗闇で 都市の上を漂い ジャズを冥想していた

ある者は 高架鉄道の下で天に向かって脳みそを暴き 貧民アパートの屋根の上でよるめ
いているモハメッド的な天使たちが明りに照らし出されるのを見た

...

ある者は 骸骨の窓辺で猥褻な詩に熱狂したり それを発表したため大学を放逐された

ある者は 髭も剃らず下着姿で 紙くず籠の中でドル紙幣を燃やしながら壁越しに聞こえ
る恐怖の声に怯えた

ある者は 安ペンキのホテルで火を喰らい 天国横丁でテレピン油を飲み 夜ごと肉体に
危害を加え苦行を強いた

夢 麻薬 白昼夢 アルコール そして陰茎と 果てしない底抜け騒ぎによって

はるかに カナダやパターソンを憧れている心の中で 時間の不動の世界を照らし 雲
と稲妻が震えている比類なき盲目の街路

...

今、狂人は彷徨し 天使は人知れず「時」の中で羽ばたいている 書き記されず死の後に来る
ことをここに記す

そしてバンドの金管の影の中で幽霊のようなジャズの衣装を纏って復活し 愛を求めるア

メリカの剥き出しの精神の苦痛がサキソフンのエリ・エリ・ラマ・ラマ・サバクタニ
と歌われその音が最後のラジオから流れて都市を震え上がらせる

一千年もの間 彼らの肉体から屠られ食い物にされてきた絶対的なことと共に

[I部終わり]

[絶叫のII部]

セメントやアルミ(金属)でできたどんなスフィンクス(怪物)が彼らの頭蓋骨を開け、脳み
そと想像力を食い尽くしたのか

怪物(Molach)! 孤独! 汚物! 醜悪! … 怪物、その精神は全き機械! 怪物、その血は流
通するドル! 怪物、その指は十の軍団! 怪物、その胸は人喰い発電機! 怪物、その耳は
煙が立っている墓! 怪物、その目はブラインドの下りた一千の窓! 怪物、その高層ビル
が永遠のエホバのように長い通りに屹立する! 怪物、その工場が霧の中で夢見、嗄れ声
を出す! 怪物、その煙突とアンテナは都市に被される王冠! 怪物、その愛は限りない石油
と石! 怪物、その魂は電気と銀行! 怪物、その欠乏は天才の亡霊! 怪物、その運命は一
雲のセックスなき水素! 怪物、その名は頭脳^{Mind}[精神・正気・知性]! … 怪物! 怪物! ロボッ
トのアパート! 見えない郊外! 骸骨の宝庫! 盲目の資本! 悪魔の産業! 幽霊国家! 見
えない精神病院! 花崗岩のペニス! 巨大な爆弾! … 河の中には真の聖なる笑い! 彼ら
はそれをすべて見た! 荒々しい目! 聖なる叫び! 彼らは別れを告げた! 屋根から飛び降
りた! 孤独に向かって! 手を振りながら! 花を手を携え! 河へ! 通りへ!

[II部終わり]

[静謐の第III部]

カール・ソロモン 僕はロックランド(精神病院)の君と共にいる

そこでは君の狂気は僕のそれより重篤だ

カール・ソロモン 僕はロックランドの君と共にいる

そこで君はとても落ち着かない気分だろう

…

カール・ソロモン 僕はロックランドの君と共にいる

僕の夢のなかで君は アメリカのハイウェイを旅し雨露を滴らせ 涙にくれて 夜 西
部の僕のコテージにたどり着く

[III部・詩の終わり]

この詩は精神病院にいる才能ある詩人 Carl Solomon を代表とする「世代の最良の精神たち」に
対する、ビート世代(Beat Generation)である作者の共感、現状への怒り、アメリカ社会の糾弾
であると言われる。“beat”とは“beaten”(打ちのめされた)あるいは“beatific”(〔神に近いゆえに〕
至福の)などの意味と推測されているが、第一部で延々と列挙されるこの世代の若者たちは、人
間的であるがゆえに社会によって不当に打ちのめされ、狂気にも至る。「吠える」という表題が
示唆するように、繰り返される憤怒の叫びや弾劾する激烈な語の音声的效果や戦略が顕著であ

る。I, II, III部にはそれぞれ異なる特徴的な言説が採用されるが、まず気づくのは、独特な言語選択と構造、そして繰り返しや畳みかけるような言説²の採用、そして破裂音や促音など英語の音声の特徴を生かした、激烈さや優しさなどを示唆する様々な言語戦略であるが、詩の言語の指し示す意味のみならず、それ以外の精巧な仕掛けにも注目しなければならない。

第一行の「私は狂気によって破壊された僕の世代の最良の精神たちが彷徨するのを見た」で、詩全体のテーマが導入・提示され、機械文明、資本・商業主義社会への順応を拒絶しその結果打ちのめされた若者たちが詳述される。彼らは失いつつあるものに「飢え 苛立ち 裸」である。第一部では60回も頻出する“who”が導く関係代名詞節により、彼の周囲の「最良の精神たち」について語られる。“who”以下の関係代名詞節がクラスター(塊)としてのリズムを形成する。「ある者は(“who”)…」が延々と重ねられ、驚くべきことに一文を構成する。アメリカ社会の犠牲者たる人々はかくも多い。そして犠牲者が列挙されるにつれて、読者・聴衆には同情、共感、そして社会への怒りの感情がつのることになる。

下品で卑猥な語も含むが比較的論理的な言述に続いて、怒声、憤慨、弾劾、そして慟哭の言説である第II部では、若き純粋な魂を食い荒らす“Moloch”(古代フェニキア神話で子供を人身御供にして食らう火の神の比喩)が、リズムの基盤・基本律となる。この神の名以外にも、短い単語を多用して怒りの対象を述べたてる。すべてが作者の怒りの対象である。犠牲者と同様、弾劾の対象たる加害者たちも多い。これらに感嘆符(!)で分節することにより、一つひとつの対象が明確になり、憤怒の強さが伝わってくる。怒りはこうして蓄積していく。”Eternity outside of Time”と言及されるように、若者たちの純粋な精神が時を超える永遠の領域に属するものであり、仏教や禅と同様の世界を目指すと考えれば、作者が理想とするものに東洋思想と通じるものがあることがわかる。仏教や禅の影響を受けたギンズバーグの独自性については、“Mind Breaths”(心の息)に言及した田中泰賢の『アメリカ現代語の愛語—スナイダー/ギンズバーグ/スティーヴンズ』第3, 4, 5章が参考になるが、「吠える」の背景には作者の古代フェニキア神話や仏教思想などの深い知識がある。このような深さは保育園のブログからはうかがえない。

第III部では、友ソロモンの側で共に生きる語り手の決意が静かに言明される。怒りを抱きながらも冷静で論理的説得力を持ち、単なる不毛な感情の吐露とは異なり、激烈に社会を弾劾する力強さを持つ第I, II部とは異なる言説が展開する。今度は“I m with you in Rockland”と“where”の繰り返しが詩のリズムを整える。何度も表明される、静かだが堅固な決意がその実行とより良い事態の実現を予測させ、読者に希望を抱かせる。

以上のように、語句選択や構成の巧みさ、繰り返しや並列、そして緊密に連動する内容(テーマ・主張)と言語表現と形式が、アメリカ文学史上非常にオリジナルな詩作品を可能にしたのだ。

「吠える」執筆以前のギンズバーグは「『散文体の文章、新聞、その他の雑文を応用したり、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズのイマジスト的な考え方から思いついて、アメリカの会話体のリズムにしたがった短いラインの詩形で詩を書いていた』(諏訪 137-8)という。それが「『自分のイマジネーションを解放し、何も隠さず、勇敢に書きたいことを書き、自分の心の奥底から溢れ出てくる魔術的なラインを書きなぐって—人生を要約し—数少ない黄金の耳にき

こえるように』(139-40)、つまり理解してくれる少数の読者に向かって書いたのがこの詩である。作者はアメリカ詩の伝統、アメリカらしさ、イマジズム³などを強く意識する詩人である。文学的伝統を踏まえた上での処女作がこの詩なのだ。亀井俊介・川本皓嗣 編、『アメリカ名詩選』ではギンズバーグの“A Supermarket in California”を収録し、彼が「聖書やホイットマンの流れを汲む奔放で息の長い自由詩形、大胆な俗語、シュールレアリスム風のイメージによって、貪婪な物欲と金権主義のために非人間化した社会を告発する預言的な詩を書いた」(292)と説明している。しかし、文学や社会などに関する広範な知識を持ち、文学伝統に通暁し、新しさを意識していなければ「文学」とは言えないのだろうか。これほど複雑で周到ではないにしても、内容・主張を表現するのに望ましい適切な語句の選択や構成なら、幼稚園ブログにも見出せた。日本語と英語の重要な違いの一つは音声とリズムである。脚韻のような英語詩に特徴的な精巧な音声の工夫は見られないにしても、ブログには同じ語句や構文を繰り返したり、命令文を多用したり、「…しろよ」、「…だよ」、「…よ」など同じ強い音で文を締めくくるなど、繰り返される音の特徴はみられる。

4. 「なぞなぞ」と「謎かけ詩」— “Humpty Dumpty” と Emily Dickinson

韻文で書かれ、押韻、繰り返し、並列、リズムなどの配慮もされている、Mother Goose の「なぞなぞ」、例えば “Humpty Dumpty sat on a wall/ Humpty Dumpty had a great fall:/ All the king’s horses/ And all the king’s men/ Couldn’t put Humpty together again” は「文学」であろうか。「児童文学」と考えられてはいるようだが、一般的な大人の読者のための「文学」というには読みどころのあるプロット/物語性を含む長さや深さが十分であるとは言えまい。それでは Emily Dickinson (1830-86) の「謎かけ詩」はどうか。

I like to see it lap the Miles—
 And lick the Valleys up—
 And stop to feed itself at Tanks—
 And then— prodigious step

 Around a Pile of Mountains—
 And supercilious peer
 In Shanties— by the sides of Roads—
 And then a Quarry pare

 To fit it’s sides
 And crawl between
 Complaining all the while
 In horrid— hooting stanza—

Then chase itself down Hill—

And neigh like Boanerges—

Then— prompter than a Star

Stop— docile and omnipotent

At it' s own stable door—

拙訳：私は見るのが好き、それが数マイルを舌先で掬い—/ それからを舐め渡し/ それから水槽に立ち止まって水を飲み/ それから— 怪物のように歩き// 積み重ねた山を回り/ それから横柄に—道端の—/小屋を覗き込み/ それから石仕切り場を削って// 自分の幅に合わせ/ それから間をくぐり/ ずっと苦痛の声をあげ/ 恐ろしい—がなり声を響かせ—/ それから丘を駆け下り—// それから「雷の子」のようにいななき/ それから—星よりも時間を守り/ 素直さと能力を秘めて—/ 自分の厩の戸口に泊まるのを—

表題なしのこの詩は4連構成の1文であることにまず気づく。後に自由詩が出現するが、伝統的な英詩の” stanza(連)”は通例、有韻の詩句4行以上から成る。この詩は各連が4, 4, 5, 4行から成り、脚韻もそれほど厳密ではないが、謎のかけ方、謎を解くための手がかりとしての言語表現の巧みさには驚かされる。ディキンソンの詩は題名がないこと、大文字やダッシュを多用すること、時に文法を逸脱し凝縮した言葉で詩の世界を構築すること、死が題材の詩においては信仰と懐疑の間の揺れ動き、恋愛詩での恍惚と絶望のせめぎあい、自然詩では美をたたえながらも疎外感がうかがわれるなどの特徴が挙げられる。(木下 他編 349) 上記の謎かけ詩には、これらとは異なる試みが発見できる。

第一行の”it”が明確でないまま、読者は詩を読み進めねばならない。それが指すもの—謎の答え—は「蒸気機関車」である。この時代、鉄道や科学技術の発達は人々に、自然が壊されることや牧歌的環境に侵入してくる文明への批判・拒絶と同時に魅惑というアンビヴァレントな感情を引き起こしたことが想像される。語り手は「それ」が次々に十個の行動をするのを見るのが好きである：数マイルの距離を”lap”（犬・猫などが舌でべろべろ舐める様子に喩える：舐めるように進み）、”lick”（[谷を]舐め尽くし）、”stop”（一時停止し）、”step”（名詞の「歩み」であるが再度動き出し）、”peer”（名詞の「凝視」であるが、じっと見て）、”pare”（石切り場を削り：石切り場を通り）、”crawl”（這うように進み）、”chase”（[丘を]駆け下り）、”neigh”（いななき：馬に喩える）、”stop”（立ち止まる）。これらの動詞は単音節語であり、複雑な多音節を習得する以前の子供の言説を模したかのようであり、子供相手の言説であるなどなぞにふさわしい語の選択である。また、蒸気機関車を犬や猫や馬などの動物さらに人間に例えること/擬人化あるいは隠喩という、文学作品でもよく使われるテクニクが用いられる。

「それ」は苦痛の声やがなり声を響かせたり、嘶いたりして聴覚に訴えもするが、多くは視覚に訴える。人間は感覚の中でも視覚認知を最も頻繁に行い情報を得る。語り手は「それ」の動き

を「見る」のが好きである。謎の解読者たる詩の読者は、語り手とともにそれらを「見る」ことで、想像力がより刺激され、なぞなぞの答えがより容易に、鮮明に頭に浮かんでくることが期待される。

次に注目したいのは、音である。この詩では舌なめずりの音でもある促音 [i]、急に止まったり発進したりすることを示唆する破裂音の [p] や [b]、呻き声である氣息音の [h] や、シューという音を連想させる [s] などで、容易に蒸気機関車の動きが想像されるようになっている。そして“neigh”という擬音語で汽笛音を示すなど、多様な特質を利用した音声的工夫にあふれている。これら言語音も「それ」の運動を感覚的に想像することを容易にする。ディキンソンは脚韻に固執することより、これらの工夫を優先させたことがわかるが、その意図は次のように説明される：

このことは、本作品が一本のリニア（直線的）な構文であることと無関係ではない。というのは、脚韻のひとつの効果は、本来リニアに流れる音声をときに反転させることによって、すでに流れて消えたはずの音声といま流れている音声を意識の中で合流させることであるが、そのような反転や合流は、一本の列車が一本の線路の上を走る姿をうたった本作品にはそぐわないからである。列車の進行は反転できないからである。（澤入 174）

その他にも音声上の工夫は見いだせる。「第五行には最後の強音節が欠けていて（女性行末）、本来八音節あるべきところに七音節しかない…。その結果、行末に余拍が生まれ、その余拍が、Around の語義とともに、『それ』が時間を掛けて山をぐるりと巡っているように思わせる余韻を作りだしている。」（176）また、のろのろ進む情景が3行にわたって描写されるが、下り坂のそれは1行であるように、スピードの違いを言説の量でも示唆している。（177）⁴

ディキンソンは隠遁詩人として有名である。自作の詩の出版も許可しなかった。彼女には謎かけ詩が少なくない。これは彼女の「いたずら好きという性格も関係している」だろうが、「謎かけという形式が、あるものをおきまりの表現から解放するから」、表現の「自由を与えてくれるから」（172）というのがその理由の一つかもしれない。しかし次のようにも考えられよう。言語表現・創作者にはディレンマがある。言語で表現できないことは、表現できない。あえて言語で表現すれば（pin down）、その語だけでは表現しきれない生きいきとした対象の存在感を台無しにする。その意味では対象を殺してしまう。ところが、“A word is dead when it is said./ some say./ I say it just begins to live/ that day.”（木下 他 350）と彼女が言うように、言葉にされたときから、その言語で表現されるものやその世界が読者の中に命を持ち始める。言葉の持つ不滅の力を信じ続けた彼女は、さまざまな言語表現を試みながら詩作した。謎かけという形式はまさに、pin downされることなく、遊びという要素のなかで、それが表象する対象の姿を読者自身が構築しなければならない。謎かけなら、正統的あるいは一般的な表現や形式から離れて、作者のほうも様々な試みが可能である。かくして、引用した謎かけ詩のような精巧な言語戦術の詩が出来上がったと考えてよからう。ディキンソンの詩では、子供向けと考えられている謎かけという形式を意図的に用いたことや言語表現上の高い洗練度を評価できる。さらに、謎の答えである蒸気機関車という点に関しても、科学技術の発展に対する当時の人々のアンビヴァレントな感情を示唆していることなどの文化的解釈も可能であろう。とすれば、表

面上は単なる謎かけのように見えても、「文学」ではないとは言えないのである。

5. 「文学」の視座、文学研究の射程—可能性と未来に向けて

「文学」とは何かという本論の問題系に進む時が来たようだ。テーマ、登場人物、背景、プロットのような小説の基本と考えられてきた要素を疑問視・解体して、可能な書き方を模索したり、文学の言語はどんなものであるべきかなどを考察したのがメタフィクション作家たちであった。句読点や空間の利用を再考したり、ページなどの印刷術に関する (typographical) 実験も行った。テーマというのが問題だとしても、何らかの主題、主張、メッセージを備え、十全な密度を持ち、洗練された言語で表現され、それ自体において閉じたものである、自律的な統一体であると小説ひいては文学を捉えても、不十分だ。ロシア・フォルマリストたちのように、「文学」の定義づけはこれまでも様々に試みられてきたが、判明したのは定義づけの困難さである。聖書を小説として読むことができるのであれば、「文学」と宗教書あるいは經典の違いは何であろうか。また、Eagletonによれば、「^{fact}事実」と「^{fiction}虚構」、「『歴史的』真実」と「『芸術的』真実」などの二分法に基づいた定義も限界がある。(上) 26-8参考) 現実のみを問い、事実を記録するとされるドキュメンタリーも、透明な視点や言語は不可能であり、虚構の要素が入ってしまう。何を記録するかを選択する時点ですでに、記録しきれない残余が生じるから、事実そのものとは離れることになる。高尚・低俗の二分法によって文学を定義しようとしても、イデオロギーの産物でしかなく、意味がない。そして今は、ピューリタン時代の初期アメリカの説教も、イザベラ・バードによる明治時代の日本旅行記もそれぞれの国の「文学」の範疇に考えられている。短いものでは物語の展開が不十分であるから、ある程度の長さが必要であるといっても、2行の詩でも文学史における重要な「文学」作品がある。例えば、イマジズム詩人 Ezra Pound, "In a Station of the Metro" だ: "The apparition of these faces in the crowd;/ Petals on a wet, black bough." (亀井・川本 編 184) たった2行であるが、「黒く濡れた枝に張り付いた花びら」である人々の顔はそれぞれの物語を語っているから、この2行のなかに無数の物語が想像できる。それを語るのは読者である。文学が社会的イデオロギーと密接に関係するとはいっても、それだけではない。メタフィクションのような芸術至上主義的で、イデオロギーとは関係が薄いものもある。

文学の定義づけの困難さは以下のような事態に表れている。新しいイデオロギーやもの見方(-ism)などによって、「文学」という概念の地平が広がり、その組成が組み替えられる。例えば、1960年代や1970年代のフェミニズムの台頭により、Charlotte Perkins Gilman, "The Yellow Wallpaper" (1892)やCate Chopin, *The Awakening* (1899) が新しく注目され、「文学」が新たに発見される。文学史は常に書き換えられる可能性を孕む。また、「文学」の同じ下位範疇・ジャンルでも、その性質が変わりうる。となれば、新しい「文学」が誕生する可能性がある。一例をあげれば、伝統的なWestern では、主要な登場人物はカウボーイと女教師であり、カウボーイ・ヒーローが町の墮落を正す/町を救う、サロンや売春宿で喧嘩や売春・買春が行われ、メインストリートでのクライマックスで決着するという一連の流れの下で進展する。しかし最近では、この大道とは外れた「ウェスタン」も出現しているという。(井上 69参考) さらにまた、これま

での情報発信・受信の手段とは大きく異なる現代のウェブなどの言説のなかで、「文学」の名に値するかもしれないものが胚胎しているかもしれない。ライト文芸のようなもの、つぶやき状の narrative やSNSの言説から「文学」が生まれまいとも限らない。

かつて「文学」といえば、いかに生きるかなど重いテーマに肉薄し、前述した Muckrakers の小説のように社会変革にまで繋がる影響力もある言語芸術であった。メタフィクションは小説、文学、言語などについて内省し、James Joyce, *Finnegans Wake* (1939)などは言語表現の可能性を徹底的に模索した。現在ウェブ小説が流行っている。「個人の凡庸な出来事をステレオタイプに綴っただけのケータイ小説や電子ブックが量産され」、(船木 366)消費される。また、「ライト文芸、キャラクター文芸、新文芸と呼び名はいろいろで、まだ定まらない」が、「イラスト重視のエンターテインメント小説」が増え、「スマートフォンゲームや動画サイトと余暇の時間を奪い合う。」(「増える『ライト文芸』—くっきり味付け、キャラ重視」:『北国新聞』2016年1月6日)視覚に訴える時代の風潮の産物だ。ウェブ小説やライトノベル花盛りで、ますます視覚的文化の支配下にある。では、エンターテインメントと文学の違いは何だろうか。

大部分の現代人のメンタリティーは変化した。ケータイ小説やウェブ小説やライトノベルはまだ「文学」として認知される途上にあるとあってよからうが、将来もずっと「文学」として認知されないままというわけではないかもしれない。「近代初頭には、食事のムードを作るためのターフェル・ムジークや、大衆向けの喜劇や聖歌を活気づける前奏曲にすぎなかった音楽が、いつしか『クラシック (古典)』と呼ばれるようになり、音楽ホールでの演奏会で、着飾ったひとたちが身じろぎもせずに聴き入るといようなものになった」(船木 318)ことを思い出さねばならない。Melville, *Moby-Dick; or The Whale* (1851) は Ahab 船長と白いクジラをめぐる闘いの物語であるのみならず、クジラという動物、捕鯨や海に関する統計や調査、観察、報告、エッセイのような言述が混然一体となっているため、伝統的でリアリスティックな「小説」とは大きく異なるものであるが、今は海洋小説いやむしろ重要なメタフィクション文学として認知されている。

「ウェブから新しい文学は生まれると思」(223)うかというインタビューの問いに、飯田は答える：

日本で「純文学」と認められるのは、「新潮」「群像」「文学界」「すばる」「文藝」など数誌の文芸誌に載った作品およびその部署が刊行する書籍にほぼ限られている。したがって、ウェブ発の書き手がそこで書けば「文学」として制度的・業界的に認められる。あるいは、「文芸誌」の部署が小説サイトを立ち上げ、そこに掲載された作品を芥川賞など既成の文学賞の選考対象作品としてレギュレーションするようになれば、認められる。そうでなければ認められない。

内容的にどうかではなく、掲載誌や担当部署で「文学」かどうかは出版業界的には決まっている。そういう意味では、少なくとも当面は「ウェブから新しい文学は(制度的に考えて)生まれまい」だろう。(223-4)

日本での「文学」概念は、出版界や批評家などの制度が決められていると言ってよからう。既存の文

学的権威は、主として高尚・低俗の二分法によって立つ価値観を守り、既存の権威/権限をもって新興勢力を否定したいのだろうか。たとえそうであっても、ウェブ小説やライトノベルの勢いは変わらないから、いずれそれらが「文学」と定義づけされる時が来るかもしれない。しかし、大多数の読者—大衆—に支持されれば、文学なのか。決してそうではあるまい。

「文学」と認められるには、条件が必要であろう。それを考えるためには、Eagletonの言が参考になる:「文学は疑似宗教でも、心理学でも社会学でもなく、言語の特殊な組織体」であり、「独自の法則・構造・方法を」持つ。「文学作品は、思想を伝える媒体でもなければ、社会的現実を反映するものでもなく、ましてや何らかの超越的真実を具現化したものでもない。」(上) 28-9)

考えられる第一の条件は、主として文字によって書かれた⁵ 作品の内容 (contents)、つまり「物語」の存在と読者に対するその「呼びかけ」である。論文やエッセイとは異なり、「小説」は「説明しない」。描かれた人物像や社会・世界や意味などを読者が構築する。物語が読者に自分自身を語る。それを受け取る読者を刺激し、読者に訴える。文学は物語の呼びかけ・刺激に対して、読者が反応する“call and response”⁶ の場である。ブルノの生まれで、プラハの音楽芸術大学卒、チェコスロバキアの国籍を剥奪され、後にフランスの市民権を得た、『存在の耐えられない軽さ』(1984)の著者 Milan Kundera は次のように論じる:

…小説は固有の内的論理によって、その旅程の果てに到達しているのではないか。小説はとっくにその可能性、認識、形式のすべてを開拓し尽くしたのではないか？私は小説の歴史がずっと前から枯渇した炭坑に比べられるのを耳にしたことがあるが、この歴史はむしろ取り逃した好機、聞き届けられなかった呼びかけの墓場に似ているのではないだろうか？
(27-8)⁷

クンデラが感じとっている四つの呼びかけが、遊び、夢、思考、時間の呼びかけである。「遊びの呼びかけ」は、たとえば Laurence Sterne, *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman* (1759-67)の呼びかけである。反動的に、その後の小説に本当らしさ(リアリティ)、写実主義的描写、線の時間言説などの軛を課したほどの「壮大な遊びとして構想され」「空前絶後の軽さの頂点」である。「夢の呼びかけ」は「夢と現実の融合」を小説上で実現させた Kafka の小説のものであり、彼によって「小説とは夢の中におけるように想像力が爆発できる場であり、また小説は一見避けがたい、本当らしさの要請を免れることを知る」(28)。読者が自由に、奔放に自身の想像力をはたらかせて、小説世界を構築することを許す赦免状である。「思考の呼びかけ」は、作品が提供する物語、特に複雑で深い内容であったり、理解が困難なものに対して、読者の知的好奇心を大いに刺激するものだ。そして「時間の呼びかけ」は読者に時間・歴史を意識させるものである。四つとは限らないであろうが、このような「呼びかけ」は小説の可能性であり、またこれらの声が聞こえてくるのが「文学」でなければならない。このことは小説に限らない。聖書でも、牧師の説教でも、ライトノベルでも、パラフィクションでも形式やジャンルは問わない。

第二の条件は、Eagletonが言うように、「言語の特殊な組織体」であり、「それ独自の法則・構造・方法」(29)を持ち、それが読者に「呼びかけ」ることである。「文学」テキストは表象・

表現に際しては最適な語句が用いられ、全体的意味内容と構造との緊密な関係やバランスなどの審美的な美しさが存在する。それを実現させる有効な言語戦略が存在する。“Poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings: it takes its origin from emotion recollected in tranquility.”は *Lyrical Ballads* (1798)での詩人 William Wordsworth (1770 – 1850)の有名な言である。「文学」の起源は力強い感情ではあるものの、それを表現する言語は平静さのなかで反芻・吟味され、「芸術」と呼べるようなレベルにまで洗練されるのである。

「文学」が大学などの教育制度の中で、実用的価値のない学問—学問ですらないとの意見もあるが—と考えられているが、はたしてそうであろうか。文学や文学研究の未来は何色か。暗黒ではないにしても、灰色がここ当分日本では予想される。しかし、上記のような「文学」の視座から見れば、文学研究の射程も広がってゆきはしないだろうか。「文学」の「呼びかけ」は文学テキストそのものの研究や、更なる/別の次元の人文科学研究にもつながる可能性がある。作品の内容 (contents) に焦点を当て、それを吟味・解明し、その美的価値を考察・研究することは今まで通り可能だ。伝統的に、そのための様々な批評理論が役に立ってきた。例えば、*Mary Wollstonecraft Shelly, Frankenstein or The Modern Prometheus* (1818)の批評には、廣野の著書の見出しだけでも「伝統的批評 (道徳的批評、伝記的批評)、ジャンル批評 (ロマン主義文学、ゴシック小説、リアリズム小説、サイエンス・フィクション)、読者反応批評、脱構築批評、精神分析批評 (フロイト的解釈、ユング的解釈、神話批評、ラカンの解釈)、フェミニズム批評、ジェンダー批評 (ゲイ批評、レズビアン批評)、マルクス主義批評、文化批評、ポストコロニアル批評、新歴史主義、文体論批評、透明な批評」が考えられる。いずれの方法でも、緻密で論理的な解明が行われ、論理的思考力が鍛えられる。新しい“ism”—批評理論—が出現すれば、新しい解釈が可能であろうから、このような研究は枯渇することはないであろう。さらに、言語表現という点からの審美性の研究も意義深い。人間の言語表現能力はどこまで審美的な産物を生産できるのか。

作品の内容にかかわる文学性や言語表現にかかわる審美性ばかりでなく、作者と彼/彼女が生きた環境や時代とのかかわり、登場人物とその背景世界などの文脈 (context) に焦点を当てて、研究を深めたり広げたりすることも、これまで通り可能だ。例えば、Charles Dickens (1812-1870)が書いた一連の Victorian novels—*The Adventures of Oliver Twist* (1837-39)、*A Christmas Carol* (1843)、*David Copperfield* (1849-50) など—を読めば、以下の様々な研究テーマが想起される：「大衆文化、セレブリティ文化の隆盛、新聞・定期刊行物市場、著述業・職業作家、演劇、メロドラマ、教養小説、視覚文化、歴史小説、挿絵付き小説、クリスマス、子供、仕事、ヨーロッパ、ヴィクトリア人とアメリカ、ヴィクトリア人の教育、ロンドン、政治、政治経済学、貴族、中流階級、都会への移住・移動、金融市場と銀行制度、英国と植民地、人種、犯罪、法律、宗教、科学、交通・輸送手段、病気と社会衛生、家庭生活、セクシュアリティ、ジェンダー・アイデンティティ」(甲斐 36)などである。保育園のブログに立ち戻れば、少子化、福祉制度、幼児教育制度、政治(政治制度、政治と予算、予算の決定、国会議員報酬や研修のための予算の使い方など様々な問題が内在する)、納税、育児、家族制度、性道徳、政治家と不倫、東京五輪、デザイン、公

募、プロとアマ、引用と盗作など、文化的/歴史的/社会的研究に開かれている。

人文科学の研究テーマは「正解」がないことが多い。「文学」は社会学や歴史学など他の人文学研究との架橋である。「文学」とは何かという問いに対する答えは、永遠に得られないかもしれない。しかしブログ「保育園落ちた日本死ね!!!」にも、筆者と読者の間の“call and response”や言語表現としての工夫という「文学」の要素が見いだせた。言述の洗練度が不足していると考えるか、個性と見なすか、問題はあろう。しかし少なくとも、下品な言葉使いという理由で「文学」ではないと切り捨てることはできまい。正しい「文学」も、正しい「文学言語・表現」もない。テキストを読む読者には、その内容 (contents) と文脈 (context) を掘り下げ、人間や社会などについて熟考する知的誘惑が待っている。誘いに乗らない手はなかりう。

註

1. サトウタツヤは、イギリスの心理学者バデリーのワーキングメモリ (作動性記憶) のモデルを説明し、「作動性記憶は揮発してしまう記憶のようなもので、瞬時に消えて無くなるものであり、それを定着させるために音韻ループ(復唱)や視空間スケッチパッド(イメージの再現)というサブシステムをもつと仮定する」(25-26) と述べている。また、「目がカメラのように作動し、画像を保存できる」「直観像」(27) を持つ人なら、自分が蓄えたその像を後に思い出し、その詳細を想起できる。音声の繰り返しや視覚的な印象を与えて、聴覚的にも視覚的にも、このブログは読者にインパクトを与えられよう。
2. 行の途中にも、畳みかけるような“to”や“off”や“and”の繰り返しにより形成されるリズムの工夫がなされている。例えば：

who talked continuously seventy hours from park to pad to bar to Bellevue to museum to the Brooklyn Bridge, /a lost battalion of platonic conversationalists jumping down the stoops off fire escapes off windowsills off Empire State out of the moon, /yacketayakking screaming vomiting whispering facts and memories and anecdotes and eyeball kicks and shocks of hospitals and jails and wars…

3. イマジズムの代表作の一つは William Carlos Williams, "The Red Wheelbarrow" である。

The Red Wheelbarrow/// so much depends/ upon// a red wheel/ barrow// glazed with rain/
water// beside the white/ chickens.

訳：まさに一大事/なのが// 白い鶏の/そばで// ^{あまみず} 雨水のつやが/かかった// 赤い手押し/車。

この詩で表現されるのは、日常の「具体的な事物」の「存在の重さ」や、色彩などのコントラスト(赤、白、透明で光沢のある雨水、硬い事物と雨水の柔らかさ)などが喚起する「新鮮な美しさ」(亀井・川本 編 174-5) である。この詩と比べてみても、伝統と新しさを意識していたギンズバーグの詩人の芸術的深さがわかる。“Moloch”の様々な唾棄すべき属性や事物が列挙されることを思い出そう。イメージを羅列し、重ねていた。また、今一度英詩の音声とリズムとイメージ喚起の巧みさの例を見よう。「吠える」を黙読したり、朗読会で単語/フレーズの繰り返しや羅列を聴く聴衆は、幻燈写真のように自然と移り行くイメージを喚起する。例えば、「ホールに立ち込めるペヨーテのにおい…屋根の上のワインの酔い 店の前でマリファナ常用者が人の車を乗り回している街々 明滅するネオン 信号機 太陽 月 ブルックリンの荒れ狂う冬の黄昏の木の震え ゴミ缶のわめき そして精神の やさしい最高のひかり」である。ここでは視覚・聴覚などの感覚的描写を繰り返して、麻薬や酒などの当時の若者文化の時代的特徴を表現している。

4. 澤入はその他の工夫として、一言節語の中でもゲルマン系の単語を使い、観念的でなく逆に「端的でストレートな言葉になっている」ことや、「ラテン系のいわゆるビッグ・ワード」を使い「『それ』がもつ得体の知れぬ不気味な部分を表している」などと解説している。(178)
5. 漫画と文字、あるいは絵画や写真と文字を混在させて使うパラフィクションのようなものもある。Art Spiegelman, *Maus* (1980) がその一例である。
6. 音楽用語では演奏者/歌唱者が互いに呼びかけ、それに対して応答しフレーズを継承していく方法であるが、

ここでは物語の「呼びかけ」に読者が物語を構築するというかたちで「応答・反応」することの言いであり、必ずしも呼びかけと応答の繰り返しではない。

7. *The End of the Road* (1958)を書いた John Barth (1930-) も”The Literature of Exhaustion” (1967) と”The Literature of Replenishment” (1984) で、現代文学が枯渇していること、しかしテーマや言語をリサイクルすることで再活性化できることを主張したことを思い出す。

引証・参考文献

- Eagleton, Terry. 大橋洋一 訳。『文学とは何か—現代批評理論への招待』(上下)。東京：岩波書店、2014。
- 飯田一史。『ウェブ小説の衝撃—ネット発ヒットコンテンツのしくみ』。東京：筑摩書房、2016。
- INOUE Hiroyuki. “The Hi Lo Palimpsest: Remapping the West (ern) in *Bobby Jack Smith, You Dirty Coward!*” *The Journal of the American Literature Society of Japan* 14(2016): 69-85.
- 甲斐清高. “Sally Ledger and Holly Furneaux eds., *Charles Dickens in Context* (Cambridge Univ. Press, 2011).” 『Dickens Fellowship日本支部年報』35 (2012) : 34-8.
- 亀井俊介・川本皓嗣 編。『アメリカ名詩選』。東京：岩波書店、1993。
- 木下卓 他編。『英語文学事典』。京都：ミネルヴァ書房、2007。
- Kundera, Milan. 西永良成 訳。『小説の技法』。東京：岩波書店、2016。
- サトウタツヤ。『心理学の名著30』。東京：筑摩書房、2015。
- 猿谷要。『検証アメリカ500年の物語』。東京：平凡社、2004。
- 澤入要仁。「謎かけの効用—エミリー・ディキンソンと鉄道」。『比較文学研究』(東京大学比較文学会)101(2016) : 171-80。
- Jones, Lucy. “‘A Rocket up the backside of conformity’ —how Allen Ginsberg’s Howl transformed pop.” <https://www.theguardian.com/music/2015/oct/08/how-allen-ginsbergs-howl-transform...>. Accessed 2016/7/29.
- 諏訪優。『ビート・ジェネレーション』。東京：紀伊国屋書店、1994。
- 瀬戸内寂聴。「名文とは」。『北国新聞』。2016年3月14日。
- 田中泰賢。『アメリカ現代詩の愛語—スナイダー/ギンズバーグ/スティーヴンズ』。東京：英宝社、1998。
- 廣野由美子。『批評理論入門—「フランケンシュタイン」解剖講義』。東京：中央公論新社、2005。
- Fischer, Kathleen. 村本邦子訳。『もっとうまく怒りたい!—怒りとスピリチュアリティの心理学』。東京：学陽書房、2002。
- 舟木亨。『現代思想史入門』。東京：筑摩書房、2016。
- Barth, John. “The Literature of Exhaustion.” *Atlantic Monthly* (Aug. 1967) : 29-34. *The Friday Book : Essays and Other Nonfiction*. New York : G. P. Putnam’s Sons, 1984. 62-77.
- … “The Literature of Replenishment.” *Atlantic Monthly* (Jan. 1980) : 65-71. *The Friday Book*. 193-206.
- 湯川進太郎 編。『怒りの心理学—怒りとうまくつきあうための理論と方法』。東京：有斐閣、2008。
- <http://en.wikipedia.org/wiki/Howl>. Accessed 2016/7/29.
- <http://hayarimono.net>. Accessed 2016/5/11.
- <http://www.poetryfoundation.org/poems-and-poets/poems/detail/49303>. Accessed 2016/7/29.